

編集室から

8月の下旬、事故に遭いました。

その数ヶ月前、学生時代に憧れていた車を思い出していました。でも、まさかその車に乗れるとは全く想像もしていませんでした。

事故後、思い起こせばほんとうに奇跡としか言いようの無い事が数々起こり、その時は飛び上がりましたが、その裏腹として、奇跡は夢だ！と告げているような現実を突き付けられる事も起こり、あたかもアクセルとブレーキを同時に踏み続けているような事態が何度となく続きました。

ほぼ二ヶ月後の先日、とうとう、「アノ憧れの車」が納車されました。

もちろん、そこそこの中古です。ところが、かなり程度が良く、よくもこんなレベルの車が、こんな価格で、とつくづく思います。

この間、様々な形で多くの方々のお世話になりました。そのどの一つが欠けても、このゴールには至らなかった事は誰より、僕自身が承知しています。

有難い事（奇跡）としか、言いようの無い出来事たち。

奇跡×奇跡=?

この事を何と表して良いか分かりません。

この度の経験で、確信した事は、ただ一つ。

叶うのは「願いではなく、思いである」ということ、でした。（先月の「つぶやき」をご参照）

この経験を元に、願いと思いの違い、そして両者のシンクロする世界を自らも実践し、そしてこれから、少しずつお伝えして参りたいと存じます。

少しでも多くの方に夢を諦めないで済む道を歩んで頂くために。

ありがとうございます。（は）



Chintara

本ニュースにレギュラー執筆していただいている川島さんが「能登の夜市」の姉妹店を開店されました。

上京された際、ご利用になってみてください。

もちろん、川島さんご自身もお店に立っておられます。

日本酒バルChintara

03-6427-8183

17:00～24:00

金曜17:00～28:00日曜祝休

渋谷区道玄坂2-19-3ライオンズマンション道玄坂1階

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2013/11

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email usric@neting.or.jp

2013/11

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

霜 月



TDLにて
by hama

寄稿『生きる力』

「農家民宿 古民家こずえ」女将 梢 正美

志賀町町居に生まれ育ち、地元の高校から、関西の短大へ進学。その後、大阪で十八年働き、三十八歳で地元にて結婚。出産。現在、子育て真っ最中である。

集落は、志賀町の山間にあり、世界農業遺産「能登の里山里海」に認定された松尾神社（国指定重要文化財）が鎮座する日本の原風景が残る小さな農村。

「何も無い。夜はネオンがない静かで寂しい。あるのは田んぼや畑、山ばかり・・・こんな何の魅力もない田舎で生涯暮らすのはまっぴらだ!」と、思春期の私は思っていた。そして、バブル期、テレビに映るきらびやかな世界に憧れ、迷わず地元を飛び出した。

ところが、生存競争が激しい都会での暮らしでは、ストレスで生きていく厳しさに押しつぶされる思いに悩むこともしばしばあった。

年に二・三度ほどの里帰りが、何よりのリフレッシュになっていった。母は必ず私の好きな料理を用意して待っていてくれた。雄大な自然。大地。懐かしい季節の香り。そして手料理。ふるさとの温もりに包まれ、心地よく癒された。

そんな帰省には、再び故郷を離れる日が訪れる。母は、決まっていたも和倉温泉のプラットホームで、列車が発発するまで見送ってくれた。手には、必ず手作りのお弁当を持たせてくれた。

家の畑で野菜が採れる度に、野菜と総菜が届けられた。実家からの度重なる荷物をあけるのが、とても楽しみになっていた。

濱のつばやき 『使命感』

十月十三日。金沢市立二十一世紀美術館で、一つのイベントがあった。

写真家・ハービー山口さんのトークショー。実に深く、味わいのあるものだった。

「写真は出会い頭のご縁。次の機会（チャンス）は無い。だから、その瞬間の小さな勇気を出すことがクリアできるかどうか。」この言葉で、自分が人物写真から逃げていた原因に気付いた。

続けて、「そして、自分のテーマに忠実であるかどうか……」

この問いは、このトークショー全体を通じて、聞くものへの問いかけでもあった。

「『自分が』を主語から外して、『あなたが』を徹底して主語にすることにヒントがある……」

一時は会社を倒産させたものの、その後成功しておられる方の逸話を引いての言葉。

クライアントの幸せをお手伝い差し上げる自分の志事は、本来そつあるべきだが、改めてハッとさせられる。さらに、「その人が、その人の持ち場で存分に働けると、輝く。それが拡がると町が輝く。それを国宝という千年以上前の平安時代・比叡山の最澄大師の言葉を引き、「主語を、社会にしよう」という呼びかけは、地域づくり・街づくりにも携わる身故が、深く響き渡る。

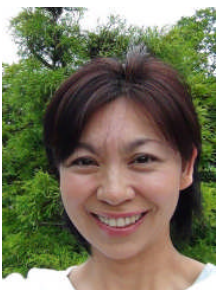
ある時、実家から届いた箱を空けると、懐かしい香りが部屋中いっぱいに漂った。家の裏山にはヤマユリが咲く。それを父が、送る荷物に入れたらしい。一輪は咲いた花。もう一輪は蕾。咲いた花は、箱を空けた時にふるさとの香りを届けようと。蕾は、しばらく美しく咲く花を楽しめるようにと。父の優しさがこもったふるさとからの贈り物だった。

真っ暗で冷たいワンルームマンション。疲れた単身を、懐かしいふるさとの香りが迎えてくれた。今までに感じたことのない優しさで温もりを感じた。「あゝ帰ろう。帰りたい。」その想いが強くなっていった。

十数年も都会で暮らしながらも、「いなかっぺ」が抜けない私。親しくなった方からは「生まれ育った地域に感謝しなさい」と声をよくかけられていた。

これまで気にとめなかった能登の四季や人情味、食や文化、歴史、伝統など、暮らしの中で何気ないものこそが、都会では失われつつある「人間の生きる力」なのではないかと思う。能登には、代々この地で暮らす能登人の手によって、それらが受け継がれ、守られている。

志賀町の里山里海にある集落では過疎化が進み、集落維持の危機が迫る。地域住民が守り継いできた地域資源を、真心籠めて活かした地域再生に、ますます取り組みたいと考えている。



【プロフィール】
（こずえ まさみ）里山里海の暮らし体験を通して、広く全国・世界へ能登の魅力発信していきます。「能登はやさしや土までも」の言葉のように、暖かい気持ちでおもてなしをさせていただきます。

「笑顔が世界から減っている」という兼高かおるさんのお話を引いての「静かなシャッター」という作品集は、普通の人々が、普通にしているこんなにも優しい表情をしているんだ。そのことに、気付かされた。

その直後、自分の「今」を納得がいくまで自分で撮る「自撮り」を勧めた上で、写真とは、他人を撮っているようで、実は写真家自身が写る」という言葉にまた、ドキリとさせられた。

ここでも、人物写真から逃げてきた自身と、じかに向き合うことを求められた。

「義務感だと、（撮影の了解を取る声掛けが）怖い。その先にある使命感だと、怖くない」

ここにこそ、本日のタイトル「写真家になる日」についての真髓に触れさせていたのだと、得心した。

「二十二十年東京オリンピックを契機に、人類全体の一つながりが変わっていかば……」

冒頭からのメッセージが、最後まで一つの軸として存在していた……。人生を掛けて、一つの事を極めようとし続けた人の言葉は深く染みる。

自分は、今まで何を人生のテーマとして生きてきたのだろうか……

そして今、見えかけているテーマは、本当に人生を掛けるテーマなのだろうか……

自らのために、クライアントのために、社会のために、自問自答は続く。

Eがない。秘密会議メンバーのイニシャルをとって名付けたAMUという投資事業組合。Eが入っていない。理屈ではなく直感で即答した。「取締役はイヤだ」と。少し落胆した顔でA・M・Uの一人が言う。「じゃあ、監査役で」。この2者の責任にどのような差があるのかはあまり知らなかったが、受けざるを得なかったというのが正直なところ。私は監査役に逃げた(つもり)。取締役を受けていたら、UAEという中東系を連想させる一層怪しい名称になっていたかもしれない。

私が有限責任を負うことに尻込みしたAMU。そのミッションを再生計画案から引用する。

「再生債務者は、再生計画認可決定を早期に得ることを第一に考え、再生債務者の取締役が役員を兼ね、再建資金提供者より出資を受けた株式会社AMUインベストメントより資金支援を受けることを前提に、同社に対し株式の100%を発行した上、…」

AMUを受け皿にした株主の権利変更は、一種のマネジメントバイアウト¹を意図したものであった。具体的には、民事再生手続きにより当社は、債務の大半を免除されるとともに、株主を総取っ替えする。それまでの債権者と株主が多大な損失を被る一方で、新たな株主は財務がピカピカになった当社の経営を支配する。すなわちAMUが当社を所有するのだ。その後、事業スポンサーが現れるまでは。

しかしながらAMUの実態は、匿名の投資家から資金を集め当社へ出資するためのハコでしかなかった。取締役と監査役を当社の役員が兼ねるが、資金提供者は匿名である。いつでも我々の首をすげ替えられ、もしかするとその後の事業スポンサーへの株式譲渡により売却益を得るかもしれない存在。このふざけたネーミングの会社がまさに再生計画の肝であり、バックに控える匿名の資金提供者が様々な疑念を生むポイントであった。出資者が誰かという質問は、債権者から幾度となく繰り返されたが、外部に明かす必要がないということで通した。その正体はA・M・U・Eとその周辺しか知らない。

AMUに、A・M・U・Eの個人のお金を一部入れようというアイデアもなくはなかった。これが実現していたら、本当の意味でのマネジメントバイアウトであった。我々は、匿名のお金よりも自分のお金を入れる方にある種の後ろめたさを感じていたのだ。

当社は投資事業で大失敗したものの、本業では黒字を出しており、民事再生手続きにより膿を出し切れれば再生する見込みがあった。また、同業他社等から見て、当社の技術(=人材)は特定分野に特化しており事業展開上、魅力があると思われた。資金提供者は、この5千万円の出資が事業スポンサーへの株式譲渡で利益が十分見込めると考えたのであろう。今回は事業スポンサーの選定から株式譲渡までを書きたいと思う。当社にとっての出口戦略の最終章である。

1: 会社の経営陣が株主より自社株を譲り受けたりすることで、会社の経営者かつ所有者になる行為のこと。

今回は現在僕自身が日々ぶちあたっている課題でもある「事業家と経営者の違い」について他者がまとめたものも引用しながら整理したいと思います。

今の私は間違いなく、会社で先頭を突っ走って、現在の事業の成長とともに、新たな事業開発を行い企業としての適切な事業マトリックスの構築に向けて邁進する事業家であることに間違いありません。

では、経営者とは? ~ 私がブログ購読している社長さんの言葉です ~

『経営者は会社の持続性や効率、仕組みを丁寧に考えながらより働きやすい職場、企業理念の浸透・共有をしながら、また、戦略のトップに立ちながら、視点、視座、視野を様々な場所に置き換え、長期的な企業価値を高めていく事に注力する』という役割だそうです。

つまり企業の持続可能性、ゴーイングコンサーンといったことに注力するのが経営者ということでしょうか。

- ・社員が働きやすい環境 < 成果を出せば収入があがる競争環境
- ・企業理念の浸透と共有 < 新たなビジネスをしていく中での価値観構築
- ・長期的に企業価値を高める < 3年タームで目標達成することが将来的な企業価値を高めるとまあ、やはりベンチャー企業の創業者は「経営者」というよりは「事業家」という部分に強みがあるのは当たり前ですね。

そして経営者というのは“訓練”によってつくれるものだと理解しました。そんな経営者になるためには以下の要素に気をつけて行くことが必要らしいです。

時間に正確で身だしなみがきちんとしていて挨拶は自らする。

時間に正確だけどもだしなみはできてないなあ。

指示の出し方が「目的」と「数字」が明確である。

目的志向ですが数字の追及に関しては甘いところも掃除熱心で清潔好き。

料理は好きですが掃除はちょっと。。。でもお店は清潔ですよ。

社員のプライベートは心配はするけど口出ししない。

そこまでの余裕なんてありません。

社員が満足できる給与を支払っている。

100%満足させてとは思えない。何をもって満足するかも違うから対話が必要です。

つらい仕事こそ自分が率先して前に立つ。

以前は何でもしていたが、今は誰でもできる事はトップがしないと決めています。

つらいという意味ではやはり経営者という職種がいちばんつらいと思うので。

家族との時間をとても大事にしている。

日曜日だけは娘という時間を一番大切にしています。でも絶対的時間が足りない。

社員の目の付くところで高級車に乗っていない。

高級車は持っていないけど、いつか買ったらこっそり乗ります。

社外とのつながりも重視している。

重視してますが、店に出ているとどうしても時間がつくれぬ。お店に来ていただいた方と少しお話ができるくらい。経営者は時間的余裕がないといけぬと感じる日々。

若い人材、飛び込み営業マンの意見に耳を傾けている。

飛び込みはすぐ帰ってしまうなあ。

最新技術に好奇心旺盛。

最近とんとついていけません。

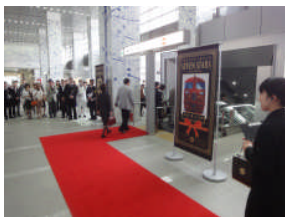
『富士の国から ~大魔神のたび~』

ななつ星の旅(その1) 静岡県職員 溝口 久

いよいよななつ星が御客を乗せて走り始める日10月15日が来た。朝から小生のスマホにはメディアの方々からのインタビュー依頼や列車内での映像提供の依頼が立て続けにある。JR九州はもちろん乗車する人が誰なのかの問い合わせに答えてはいない。どうやらネット検索で小生が書いた「ななつ星当選」のことを書いたブログにヒットしたらしい。それ故、これからあとも集中的に取材を受けることになる。博多駅前テレビ朝日、そして前日の我が家にまで取材に来られ、その後ずっと追いかけることになる日本テレビ、西日本新聞の地元紙はじめ全国紙も。

「日本テレビの真相報道バンキシャ!」担当の三木さんは福岡入りする前に、我が家に寄って、当選通知や旅のガイドに目をとおし、今回のためにつくったスーツもカメラに収めていった。そして当日の朝、妻とななつ星客専用の「金星ラウンジ」に向かう姿を追いかけて、感想共々ハンディカムに落とし込んだ。お次はテレビ朝日だ。博多駅をバックにした映像が早速にモーニングバードで紹介された。

金星ラウンジは博多駅三階にあるが、1階からエスカレーターを上る前に、JR九州のななつ星スタッフに呼び止められ、先導してくれた。花に飾られ、ななつ星のゲートに掛けられた幕の向こうがラウンジだ。満面の笑みをたたえたななつ星の制服に身を包んだクルーがでむかえてくれている。その前にも西日本新聞の吉田記者、久しぶりにお会いする日経新聞の豊田記者も待っていてくれている。世界で初めてななつ星に乗る乗客としてはいやが上にも気持ちが高揚してくる。記者の方から切符を見せてくださいと異口同音にリクエストされるが、切符は持っていない。名を名乗らなくても、クルーからは私が溝口だということが、わかっているようだった。ウェルカムドリンクが出され、森伊蔵のジュレがのった未体験の味のスイーツが出された。ラウンジにいる面々に目をやると、小生も含めマスコミが書いている富裕層と言った感じはあまりなく、フツウのオジサン、オバサンの集まりに見える。見回したところ14組



のゲストの我が夫婦より若いカップルは一組のみ、後に名刺交換すると岩手医科大学の医師で何と新婚旅行にななつ星に乗ることになったとのこと。

乗客が集まったところで、唐池社長が挨拶に立った。「一年ほど前に予約をスタートしたところ即時申し込みがあり、高い倍率の中をくじ運の強いお客様ばかりを迎えることになった(笑)。ななつ星は新しい日本の鉄道の旅を切り拓き、九州の観光を変えていくという決意である。14組28名様と一緒に「これからの日本の旅」を興奮の中で大いに楽しんで行きましょう」と挨拶があった。続いてトレインマネージャーから9人の搭乗クルーの紹介があった。そしてスパークリングワインでスタートの乾杯となった。

いよいよホームに向かうことになる。何と金星ラウンジからはレッドカーペットが敷かれているではないか、私どもを世話してくれる可愛い原尻さんの後について階段を下りホームが見えてくる。そこにはななつ星の出発を一目みようとするホームから溢れんばかりの人が、そして舞台があり椅子が並べられた出発式スペースの後ろにはテレビカメラが多数控えていた。この出発式には我々の席も用意され、前には知事、市長、議員、JR九州の役員が並んだ。唐池社長、福岡県知事、そして最後にデザイナーの水戸岡鋭治氏が壇上に立った。車両を造ってくれた日立他メーカー、日本の匠、夫人、会社スタッフ、マスコミそして今日の乗客に謝辞を述べ、そして「このプロジェクトを遂行する唐池社長はすごい、私たちの誇りだ」と挨拶された。最後は言葉に詰まった様子だった。

12:28ななつ星が大きな歓声、カメラのシャッター音、フラッシュの光をピカピカのリヤルレッドの車体に浴びながらホームに入ってきた。

いよいよ「新たな人生にめぐり逢う、旅」のスタートだ。(つづく)

右写真は、ななつ星専用「金星ラウンジ」にて、唐池社長、水戸岡鋭治氏、妻そして私

